

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

しいのみ学園園長

鼻地三郎氏

鼻地三郎氏は、1906（明治39）年北海道釧路に生まれる。父は従軍した父に倣い、軍人となることを目指した。しかし、受験した広島幼年学校の初日検査で、目が悪いとの理由で不合格となった。父は「子供と暮らすか。」と問われ、鼻地三郎氏は5年間の長きにわたり教育に身を投じた。卒業した氏は、山村の小学校に赴任した。生活のなかでも、子供は純真でたくましく、子供らに向けられた氏の眼差しは、文芸雑誌『潭海』や中国新聞に発表された「早刈り居り」は、その1つである。生活の後、広島師範学校専攻科に入学し、そこで舎監をしていた教育学者、玖村氏は、玖村から人生観が変わるほど多岐にわたる。師のようになりたいと、何十倍も勉強した。広島高等師範学校の入学試験に挑戦し、同じ4月から高等師範学校教授に就任した。田松陰研究の指導を受けた。隣家に住み、家族のように気にかけていただいた。任後、広島文理科大学で勉学を再開し、再度、長男が高熱に侵されて、脳性小児麻痺となる。愛情によって、この子の病気を治さした。「何となく」と一念をもって、心理学による治療を求めた。1940（昭和15）年、請われて福岡女学院に赴く。長男に2年遅れでようやく就学許可がおり、同附属小学校に通うことになった。しかし、え聞こえるのは長男のいじめられる可憐な泣き声であった。保護者らの無理な要求は、泣き声であった。新制中学校に進学しても、いじめられるほどのいじめに遭い、長男は2階から飛び降り、学校を途中で去らねばならなかった。

猶予を以て泣きながら、抱き合っていた。次男も長男と同じ小児麻痺となり、抱き合っていた。次男と退学を余儀なくされた長男の意思を、1954（昭和29）年、氏は「しいのみ学園」を設立し、そのことを考えた施設が、基準に合致しないとの理由で、行政による支援は得られなかった。居場所をつくらせてくれた子供たちには、手記に記して、その施設となった。氏の献身的努力で知られるところとなり、映画化された。氏の実践は、一貫して障害児教育と、その強い教育愛と、医学に裏打ちされた理論による、学会で注目される新知見の創発、生を引き出す教材や教育法の開発、（現福岡大学）においても、障害児教育を進め、常に先進的モデルを示して、教授兼大学院長として招かれた。鼻地氏の人生の師であった玖村氏は、玖村の人生の師であった玖村氏は、ともに読んだ『シュタンツ便り』のことばで始めている。「おおよそ、その何れの部分をとってみても、どして生きているのである。隠れて、どして公に働くときも、成敗得失を顧みず、風光が悠々として表現せられて、その生涯は、歴時的にいつても決定的に見ても極めて波瀾が多かつた。」このべの、ローンを描いているようにさえ思える。生涯を「しいのみ学園」という妥協なき教育に、それを必要とする人たちに私財をなげき、これを支える教育理論と実践を発展させていくことを生涯の課題として、なされている。鼻地三郎氏のこの長年にわたる功績を、ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く